

読谷村楚辺における「赤犬子伝説」の成り立ちと継承に関する一考察

A consideration of origin and succession  
: Case of Akainuko Densetu in Yomitan-son Sobe

種川 幸

Yuki TANEKAWA



SAPPORO INTERNATIONAL UNIVERSITY

札幌国際大学北海道環境文化研究センター

HOKKAIDO RESEARCH CENTER OF ENVIRONMENT AND CULTURE



# 読谷村楚辺における「赤犬子伝説」の成り立ちと継承に関する一考察

A consideration of origin and succession:

Case of Akainuko Densetu in Yomitan-son Sobe

種川 幸

Tanekawa Yuki

## 要約

沖縄県中頭郡字楚辺に「赤犬子伝説」と呼ばれる伝説が伝承されている。この伝説は、字楚辺で限定的に継承されている伝説であり、楚辺人がアイデンティティを獲得するに際し、重要な役割を果たしていると言える。

では、この犬と人間の間生まれた「赤犬子」を主人公とする伝説は何処から来たのか。また、どのような理由によって現在に至るまで伝承されつづけているのであろうか。

本論文では、「赤犬子伝説」の原型を東南アジアを中心に伝承される「犬祖神話」の中に求め、同時に、神話が伝説となる過程、そして、楚辺における「赤犬子伝説」の役割を年中行事などを通し調査・分析した。

その結果、伝説は様々な仕掛けに支えられることにより、楚辺における紛れも無い文化的事実として継承されていることが明らかとなった。

## =目次=

### 序章

第1節 はじめに

第2節 神話・伝説・昔話

### 第2章 「赤犬子伝説」

第1節 概要

第2節 伝説のバリエーション

第3節 時代背景

第4節 伝説が語る人物像

### 第3章 楚辺犬祖神話との比較

第1節 犬祖神話

第2節 構造の比較

第3節 モチーフの否定

### 第4章 沖縄における伝説と楚辺の赤犬子伝説

第1節 説話が伝説化しやすい土地

第2節 沖縄社会との矛盾

- ・ オナリ神
- ・ 位牌

第3節 楚辺における伝説のあり方

- ・ 伝承法とバリエーション
- ・ 伝説の再生産としての祭り
- ・ 存在を証明するもの
- ・ 伝説の楚辺における役割

### 第5章 今後の課題

注釈

参考文献

## 序章

### 第1節 はじめに

沖縄県中頭郡読谷村字楚辺<sup>(1)</sup>に「赤犬子伝説」と呼ばれる伝説がある。本論文を書くにあたり、1998年・夏、1999年・冬、及び1999年・夏と3度にわたり当該地でフィールドワークを行い、その様々な場面で、この伝説が今なお楚辺の人々の中に根付いているということを強く実感した。

調査において得ることのできた赤犬子<sup>(図1)</sup>にまつわる2つの逸話がある。

一つ目は、戦後すぐに起こった出来事であった。赤犬子宮<sup>(2・図2)</sup>が建てられている丘を米軍のブルドーザーが破壊しようとしたことがあった。米軍がその半分を崩したまさにその時、ブルドーザーは突然止まり、それ以上の作業ができなくなった。何度試みても、結果は同じであったと言う。この事件は、赤犬子<sup>(3)</sup>が自らの拜所を守る為にその力を使ったためだと語られている。

二つ目は、2～3年前に起こった出来事であった。ある女性が、赤犬子宮にお参りに行った際に、ハンドバックを置き忘れた。後で、気が付いた女性が赤犬子宮に戻ってみると、そこには赤犬(茶色い犬)がハンドバックを守るかのように座っていたのである。

二つ目の逸話を語ってくれたインフォーマントは、「赤犬子様は、正しい神様なので守っていてくれた」と真剣な表情で語った。

これらの逸話は、赤犬子伝説がまぎれもなく楚辺において人々の信仰を集めていることを表わしている。なぜなら、伝説が遙か昔の人物や出来事について語っているにもかかわらず、今なお、新たなる逸話を生み出しているからである。



位牌と共に奉られている赤犬子像

(オリジナルであるかは不明) <図1>

では、この伝説はどのような理由によって楚辺の人々に受け容れられてきたのであろうか。

本論文は、「赤犬子伝説」が「犬祖神話」（後述）のバリエーションであり、神話を伝説へと作り変える人々の努力により、伝承されてきた物語ではないかとの推論のもとに、展開して行くこととする。

一つの物語及び知識を継承するという行為には、何世代にも渡る人々の不断的努力が要求される。なぜなら、世代交代はどの時代においても、確実に行われるものだからである。そのような条件の中、ある地域において親から子へ、子から孫へ、と脈々と受け継がれ、信じられている物語が存在しているという文化的事実は、決して軽視できないと筆者は考えている。



赤犬子の拝所。赤犬子スージの時には、歌や伝統芸能（踊り）が奉納される

<図2>

## 第2節 神話・伝説・昔話

本論文のテーマである「赤犬子伝説」は、その名のとおり<伝説>として伝承されている。伝説とは、どのような説話を指すのかを明確にしておこう。同時に、果たして「赤犬子伝説」が<伝説>たるものであるのかについても検討する。

神話・伝説・説話の分類の仕方は文献により多様であり、一概に言う事は困難である。ここでは、『日本神話と昔話』（松前 1976 155 - 156）より引用した以下の分類を基本と

する。

- 神話 神々及び彼らの行為を扱い、また宇宙、自然、文化、祭祀などの起源を物語る神聖な説話
- 伝説 ある人物、場所、事件などに関して語られた史的伝承。その時代は原古ではなく歴史時代であり、主人公も神ではなく、人間の英雄や高僧
- 昔話 娯楽を目的とした説話。時、処、は不定で、漠然とし、人物もありふれた名で、庶民の出であることが多い

『世界大百科事典』によると、〈伝説〉とは「いずれの場合にもかつての日にその内容が事実であったと信じられた歴史、もしくはそうした経過を有している。その内容は自分たちの存在に意義付けを与えてくれるものである。また伝説の特性として、支持する人々の信心、いわゆる信仰により支えられている。さらにその存在証明のために記念品もしくは事跡が用意されている」ものである。

「沖縄の説話のほとんどは、『チテーバナシ（伝え話）』<sup>(4)</sup>として伝承されている。その為、伝承者の意識においては、伝説と昔話を切り離して考える傾向がほとんど見られない。」という。(岩瀬 1987 235) このような特殊な地域において、神話、伝説、昔話と民間口語伝承を分けて考えることは、難しいと言わざるをえない。しかし、「赤犬子伝説」の主人公である赤犬子は人間であること、楚辺内には記念品・事跡の存在が認められること、人々が伝説に語られている物語を真実として認識していることから、その名のとおり〈伝説〉として捉え、本論を展開していくこととする。

## 第2章 「赤犬子伝説」

### 第1節 概要

伝説の主演である「赤犬子」は〈あかいんこ〉として、『沖縄大百科事典』に次のように解説されている。「有名なおもろ<sup>(5)</sup> 歌唱者。古典音楽の世界では三味線歌唱をはじめた人として信仰されている。『おもろさうし』<sup>(6)</sup>では、〈あかいんこ〉のほかに対語の〈ねはのこ〉もあり、ふつうは〈あかのおゑつき〉〈ねはのおゑつき〉と呼ばれている。読谷山間切り（現読谷村）の阿嘉・祢波の出身で、童名を〈いんこ（犬）〉と言った。〈こ〉は接尾辞。この〈犬〉から、犬とのあいだに生まれ、津堅島に流されたという伝説も生まれている。- 中略 - 琉歌に〈歌と三味線の 昔はじまりや 犬子音揚りの 神の美作〉とあり、古くから歌三味線の始祖と信じられている。」

この説明から、歴史上のおもろ歌唱者としての赤犬子の存在は確認できる。しかし、「赤犬子伝説」の拠り所というべき、その名前に対しては、子供の頃のあだ名であると簡単に説明されているのみである。だが、調査によって得られた赤犬子像は三線<sup>(7)</sup>を作り出した楚辺の文化的英雄であり、字<sup>あざ</sup>の守り神であった。

以下に記すのは、『アカノコ』（比嘉・村山 1990）に掲載された伝説の原文と、掲載されていた訳を参考に方言を訳したものである。本論文では、この物語をテキストとして使用して行くこととする。図3は、物語を簡単に図示したものである。

### 《赤犬子伝説》

#### アカヌク伝説（原文）

昔、読谷村間切楚辺村ぬ屋嘉<sup>ん</sup>でいるきねーんかい、チラー<sup>ん</sup>でいるいっぺー美<sup>ら</sup>はる女<sup>いんぐ</sup>子<sup>こ</sup>ぬうてーるぐとーるびーん。うぬ女<sup>いんぐ</sup>子<sup>こ</sup>ぬ、いっぺーかなさひちよーたる赤犬<sup>あかいん</sup>ぬういびーたん。ある年<sup>とし</sup>に、いっぺーながひゃーいぬ<sup>ちち</sup>続<sup>つ</sup>ち村<sup>か</sup>ぬ井戸<sup>い</sup>やむる枯<sup>か</sup>りはていて、村<sup>ちや</sup>人<sup>び</sup>ぬ達<sup>た</sup>いっぺー困<sup>ま</sup>とーびたん。

うんなある日に、赤犬ぬしぶーと濡<sup>ぬ</sup>りてい戻<sup>もど</sup>りていち、うぬ赤犬ぬチラー<sup>か</sup>前<sup>まへ</sup>うてい吠<sup>な</sup>きかかてい着<sup>き</sup>物<sup>もの</sup>ぬ裾<sup>すそ</sup>くーてい引<sup>ひ</sup>つ張<sup>は</sup>たぐつうや。くんとるーひゃーいなかひ、犬<sup>いん</sup>ぬしぶーと濡<sup>ぬ</sup>りていちゆーせー不思議なくとうんり思<sup>おぼ</sup>てい。チラーやしぐ後<sup>う</sup>追<sup>う</sup>てい行<sup>い</sup>じゃぐとう、うぬ赤犬やムラぬ南<sup>みな</sup>側<sup>が</sup>ぬ洞窟<sup>くわ</sup>んかい入<sup>い</sup>つち行<sup>い</sup>じょーびーん。あんしから、うぬ赤



犬がまたしぶーと濡りていちゃれー、チラーやな一驚<sup>うどろ</sup>ち、すぐ家<sup>や</sup>んかい戻<sup>むど</sup>てい、うぬくとうやーにんじゅかい話しさびたん。うりから洞窟<sup>がま</sup>んぬ奥<sup>うく</sup>んかい水<sup>み</sup>ぬありんち分かてい、ひやーいしぬじゃんりぬくとうやいびーん。くりがクラガー捜<sup>たづ</sup>めーいんじゃちやる由来<sup>ゆれ</sup>やいびん。

うぬ前<sup>め</sup>ぬ昔<sup>むか</sup>え、楚辺<sup>しへ</sup>村<sup>むら</sup>や水<sup>み</sup>ぬいきらはぬミハガーがまんどーたるぐとーびん。赤犬<sup>あか</sup>がクラガー捜<sup>たづ</sup>めーていからー、楚辺<sup>しへ</sup>ねーミーハガーやいきらくなたんりぬくとうやいびん。

またうぬ美<sup>ちよ</sup>らかーぎーチラーや、村中<sup>むらぢゆう</sup>ぬぬじゅまーがんり、うぬチラーうとうしあーちゃせー大家<sup>うふや</sup>ぬカマーんでいるニーセーやるぐとーびん。やしが二人<sup>ふたり</sup>が互<sup>たが</sup>えに想<sup>う</sup>いかなさひちよーしうらはごーさしち、ムラぬあるニーセが大家<sup>うふや</sup>ぬカマー殺<sup>ころ</sup>さびたん。チラーや、互<sup>たが</sup>えに想<sup>う</sup>いあーとーるカマーがうらんてい、毎<sup>め</sup>日<sup>にち</sup>泣<sup>な</sup>き暮<sup>く</sup>ちよーびーたん。うぬチラー心<sup>こころ</sup>慰<sup>なぐさ</sup>みたせー、前<sup>まへ</sup>からかなさそーる赤犬<sup>あか</sup>やいびーたん。

カマー殺<sup>ころ</sup>ちやるニーセや、チラーがクラガーんかい水<sup>み</sup>汲<sup>ひ</sup>みんが行<sup>い</sup>くせー分<sup>ぶん</sup>かとーぐとーう。かにていからひち待<sup>まち</sup>ちよーたるニーセや、ある日<sup>ひ</sup>、クラガーかい先<sup>ま</sup>廻<sup>まわ</sup>いひち、チラーがちゅーし待<sup>まち</sup>ちよーびーたん。うりぬん分<sup>ぶん</sup>からんチラーやクラガーぬ入り口<sup>いりぐち</sup>までいちゃぐとーう、あつたにくくちぬ悪<sup>わる</sup>しくなてい、んまんかいちんまがとーびーたん。んまんかいへーりんちやーせー、あめニーセーウナイやいびーたん。んまかいちんまがとーるチラー見<sup>み</sup>ち慰<sup>なぐさ</sup>みてい家<sup>いへ</sup>かいやらさーに、うりが代<sup>しろ</sup>わい自<sup>ご</sup>分<sup>ぶん</sup>がクラガーんかい水<sup>み</sup>汲<sup>ひ</sup>みんが入<sup>い</sup>って行<sup>い</sup>じよーびん。

奥<sup>おく</sup>うてい待<sup>まち</sup>ちよーたるニーセーや、入<sup>い</sup>ちりよーちやーしんチラーるやるんでい思<sup>おも</sup>てい、押<sup>お</sup>し押<sup>お</sup>しにんうすていねーびらん。あんさーに外<sup>が</sup>んかい出<sup>で</sup>じていんちやぐとーう、二人<sup>ふたり</sup>や兄<sup>あや</sup>妹<sup>い</sup>やーてーさやーんち分かてい。恥<sup>は</sup>じかさとう恐<sup>おそ</sup>るさぬ、うぬ兄<sup>あや</sup>妹<sup>い</sup>やうまうてい命<sup>いのち</sup>捨<sup>す</sup>ていとーびたん。

うぬくるチラーやカマー子<sup>こ</sup>持<sup>もち</sup>ちよーびーたん。やしがカマーと親<sup>おや</sup>なまぢきてーる仲<sup>なつ</sup>んあらんあい、亡<sup>ま</sup>ひちうらん人<sup>ひと</sup>るやい。子<sup>こ</sup>持<sup>もち</sup>ちよーんるせー不思議<sup>ふしぎ</sup>なくとーう。赤犬<sup>あか</sup>ぬ子<sup>こ</sup>あながやーんち、噂<sup>うわさ</sup>あ村<sup>むら</sup>中<sup>ぢゆう</sup>んかい広<sup>ひろ</sup>まてい、あんしチラーや村<sup>むら</sup>んかいうるくとうんならん行<sup>い</sup>方<sup>かた</sup>ぬ分<sup>ぶん</sup>からんないびたん。

うりから、何<sup>なん</sup>年<sup>ねん</sup>か後<sup>あと</sup>に、チラー親<sup>おや</sup>ぬ達<sup>たち</sup>や、チラーが伊<sup>い</sup>計<sup>けい</sup>島<sup>しま</sup>んかい渡<sup>わたり</sup>とーんりる噂<sup>うわさ</sup>聞<sup>き</sup>ち、女<sup>おんな</sup>ん子<sup>こ</sup>捜<sup>たづ</sup>めーてい行<sup>い</sup>かびたん。やしがチラーや親<sup>おや</sup>ぬ達<sup>たち</sup>とういちゃいし恥<sup>は</sup>じかさひち、男<sup>おとこ</sup>ん子<sup>こ</sup>残<sup>のこ</sup>ち命<sup>いのち</sup>捨<sup>す</sup>ていとーびん。親<sup>おや</sup>ぬ達<sup>たち</sup>やなちかさーあしが、チラーやうまんかい葬<sup>ほう</sup>むてい、男<sup>おとこ</sup>ん子<sup>こ</sup>楚<sup>し</sup>辺<sup>へ</sup>村<sup>むら</sup>んかい連<sup>つ</sup>ていちゃーびたん。うりが、後<sup>あと</sup>々<sup>と</sup>ぬアカヌクやるぐとーびー

ん。

育あ々になりたる赤アカ犬子や雨垂あまえ水ぬ音うと聞きち珍ひるましむんりち、クバぬ枝えし棹そう作ちてい馬うまん  
尾じゆや弦せんなち、三味線さんしん考かんえ一いんじゃち。うぬ後うう、赤あ犬子や三味線さんしん弾ひきが一いち一い歌うたあびて  
い、村々旅むらひちえ一いると一いび一いん。

うぬ旅するば一いに、北谷村きただにむらんかい来きぐとう、喉のどが乾かわききてい水みづ飲のみむんりあるきね一いん  
かい入いつちやぐとう、うまんかい4歳よちびけ一いんないる童わらびむういび一いたん。「いったスーや  
ま一いかいが」んち聞きちやぐとう、「ユンヌミ取とんが」り言いやびたん。また、「いた一いア  
ンマーやま一いかいが」んち聞きちやぐとう、「冬青草ふゆあはら 夏立枯取なつたちがりんが」り言いやびたん。

やしが、赤あ犬子やうぬ意味こころん分わからん「ぬがあん言いせ一い何なにぬ意味こころが」んち、問とていさ  
びたぐとう。「スーやトウブシ取とんが」、「アンマーや麦刈あんが」り言いやびたん。赤あ犬子や  
童わらびえ、「変かわった子こやっさ一い」りちまたんうぬきね一いんかい行いち。たとうくるぬ親おやんかい、  
「貴方あなたあ童わらびえあたいめ一いぬ人ひとゆか一い優やさりと一いる知し恵え持もちよ一いぐとう 一いか一い坊主ぼうしなし  
よ一い」りち帰かえてい行いかびたん。うぬ童わらびぬ「北谷長老きたたにちやうらう」んでいる坊主ぼうしやるぐと一いびん。

うりから赤あ犬子あかぬこが中城なかくしぬ安谷屋あだにや旅りそ一いる時とき、喉のどが乾かわきていうまんれ一いから歩あちよ一いる  
童わらびんかい、「大根だいこんくいていとうらし」言いちやぐとう、持もちよ一いる大根だいこんぬ葉はん取とって、皮かわ  
ん剥はじ食くみ一いやっさるぐとうひち切きつち、赤あ犬子あかぬこんかいうさぎたなり。さぐとう、「うぬ  
童わらびえ ちつとうしぐりむんかいないるはじ」んり言いちやぐとう、うぬ童わらびや後うぬ  
「中城若松なかくしわかまつ」んかいなたんちぬ話わし。

またうりから国頭くんにづか旅りそ一いるば一いに、恩納間切うんなまじり瀬良垣村せらがむらんかい、さしかかていちやぐと  
う。うや一いしくなや一いに浜はうと一いてい船造ふねぞうと一いる大工おおいかい物ものいみたぐとう、しぐはにら  
つてい。あんし瀬良垣せらがむらぬ船ふねえ「瀬良垣水船せらがむらみづふね」りちな一いぢきせ一いるぐと一いびん。

ゆぬ足谷あしたんち茶ちやんかい行いち、うまうていん物ものいみしちやぐとう、うまぬ船ふね大工おおい産うんかいや、  
いっペーう取とり持もちさつてい。あんし谷茶たにちやぬ船ふねえ、「谷茶速舟たにちやすみふね」んちな一いぢきさびたん。  
うぬ、後うう、赤あ犬子あかぬこが言いちやるぐとう、瀬良垣せらがむらぬ船ふねや沈しり谷茶たにちやぬ船ふねやいっペーゆ一い速すみ  
ないびたりん。

な一い瀬良垣せらがむらぬニセ一い達たつやいっペー怒こみち、赤あ犬子あかぬこ殺ころすんち後うう追うていっち。今いまぬ、管あ  
ぬあんとうくままり追うちみらつてい、うまぬ岩いんかい杖くちん立たててい天てんぬんかい算あ  
いび一いたんり。

また赤あ犬子あかぬこやうぬ他たにん、唐たうから麦あ、豆ま、粟あ、ニ一いブルとうか持もちつち、沖繩中おきなんか  
い広ひろみて一いるぐと一いびん。赤あ犬子あかぬこが嘉手納歩かじなあつちよ一いに、道みちん悪わるさぬ疲つかていんういび一いぐ

とう、うまうてい<sup>くる</sup>廻り持ちよーるニーブル<sup>う</sup>落ちほーていさびたんしが。赤犬子や「くまねーニーブルーみーんなよーやー」り言やびたぐとう、<sup>かじな</sup>嘉手納んかいやニーブルやみーらんなたんり。

あんすぐとう楚辺村うて一昔から、赤犬子や琉球古典音楽の始祖、五穀豊饒ぬ神とうひちあがみてい、<sup>めーにんきゅう</sup>毎年旧<sup>くんぐわち</sup>ぬ9月20日<sup>ちか</sup>ねー、「<sup>アカヌク</sup>赤犬子スーギ」んち、まぎまぎーとうそーびん。

(比嘉・村山 1990 1-6)

### 赤犬子伝説 (訳)

昔、読谷山間切楚辺村の屋<sup>やか</sup>嘉 (\*1) という屋号の家に、チラー (\*2) という大変美しい娘がいた。その娘には大変かわいがっている赤犬 (\*3) がいた。ある年、長い早魃が続き村中の井戸 (\*4) が全て枯れ果てて、村の人たちは大変困っていた。

そんなある日、赤犬が全身ずぶ濡れになって戻ってき、チラーの前で吠えながら着物の、裾をくわえてひっぱっていった。この日照りに犬が、ずぶ濡れで帰ってくるのはおかしいと思ったチラーが、さっそく後をついていくとその赤犬は集落の南側の洞窟 (\*5) に入っていた。暫くすると、また赤犬がずぶ濡れになって帰ってきたので、チラーは驚き、急いで家に戻り、そのことをみんなに話した。それから洞窟の奥に水のあることが分かり、早魃を防ぐことが出来たそうだ。これがクラガー (暗川) (\*6) 発見の由来である。

それ以前は、楚辺には水不足のために目の見えない人が多かったが、赤犬がクラガーを発見してからは、目の見えない人はいなくなった。

またその美しいチラーは、村中の若者の憧れの的であったが、このチラーの心を見事に射止めたのは大屋 (\*7) <sup>うふや</sup> という屋号の家のカマー (\*8) という若者であった。ところが二人の幸せそうな様子を妬んだ、村のある若者が、嫉妬のあまりカマーを殺してしまった。愛するカマーを失ったチラーは悲しみのあまり毎日泣いて暮らしていた。そんなチラーの悲しい心を慰めてくれたのが、以前から可愛がっていた赤犬であった。

カマーを殺した若者は、チラーが、クラガーに水汲みに行くことを知っていた。かねてから機会を狙っていた若者は、ある日クラガーに先回りしてチラーが来るのを待ち構えていた。何も知らないチラーは、クラガーの入り口付近に差し掛かったときに、急に気分が悪くなり、その場に座り込んでしまった。そこにたまたま若者の妹が通りかかっ

た。座り込んでいるチラーを見て、氣遣って家に返し、自分が代わりに水汲みに行った。

奥で待ちかまえていた若者は、入ってきた女をてっきり、チラーだと思って、無理やりに犯してしまった。やがて外に出てみると、二人はなんと兄妹であることがわかった。恥ずかしさと恐ろしさのあまり、その兄妹はその場で自害してしまった。

その頃、チラーはすでにカマーの子を身ごもっていた。しかし、カマーとは親が決めた縁談でもないし、今はすでに亡き人である。身ごもっているとはおかしい、赤犬の子を身ごもってしまったのではないか、という噂がたちまち村中に広まった。そして、とうとう村にいることもできずに、チラーは行方をくらましてしまった。

その後、何年か後にチラーの両親は、チラーが伊計島に渡っているという噂を耳にして、娘を訪ねていった。しかし、両親に会うことを恥じたチラーは、男の子を残したまま自害してしまった。両親は悲しみながら、我が娘をその地に葬って、男の子と一緒に楚辺に連れて帰った。この子が後の赤犬子である。

成人した赤犬子は、ポタポタと雨の落ちる音を聞いてひらめき、クバの葉柄で棹を作り、馬の尾を弦にして、三線（三味線）を考え出した。その後、赤犬子は三線を弾きながら、歌を歌って村々を旅するのであった。

その旅の途中、北谷村に差ししかかったときに、喉が渴いたので、ある農家に水をもらう為に立ち寄った。するとそこには、4歳くらいの子供がいた。赤犬子が「おまえのお父さんは何処へ行ったか」と聞くと「ユンヌミ (\*9) 取りに」と答えた。「おまえのお母さんは何処に行ったか」と聞くと「冬青草 夏立枯取りに」と答えた。

しかし、さすがの赤犬子も意味がわからない。「おまえが言っているのはどう言う意味か」とたずねたら、「父は松明（トウブシ） (\*10) 取りに」、「母は麦刈りに」と答えた。すっかり感心した赤犬子は、再びその農家を訪ねて両親に「あなた方の子供は、普通の人より優れた知能を持っているから、将来坊主にしてあげたら良い」と言い残し去って行った。この子が後の「北谷長老」 (\*11) という坊主であったという。

それから、赤犬子が中城の安谷屋を旅しているときに、大変喉が渴いたので、近くを通っていた子供に「大根をくれ」と言うと、その子供は持っていた大根の葉を取り皮も剥いて、食べやすいように切って赤犬子に渡したので「この子供はきっとえらい人になるだろう」と言ったら、その子供は後の「中城若松」 (\*12) になったと言う。

また国頭方面を旅しているときに、恩納村の瀬良垣に差ししかかった。そのときお腹がすいていたので、海辺で船を作っている大工に物乞いをしたところ、むげに断られてし

まった。それで、瀬良垣の船に「瀬良垣水船」と名付けた。

その足で北谷に向かい、そこでも同じように物乞いをした。するとそこの大工は、丁寧にもてなしをしてくれた。それで、北谷の船を「北谷速舟」と名付けた。その後赤犬子が言った通りに、瀬良垣の船は水に沈んでしまい、北谷の船はとても速い船となった。

そのことに大変怒った瀬良垣の舟大工達は、赤犬子を殺そうと追ってきた。そこで現在の赤犬子宮のある場所に追い詰められた赤犬子は、その岩に杖を立てて昇天してしまった。

また、赤犬子はその他に唐から麦、豆、粟、ニーピラなどを持ち帰り、それを沖縄中に広めた。赤犬子が嘉手納を歩いているときに、道も悪く疲れていたのもニーピラを落としてしまった。それで赤犬子は「この土地にニーピラは生えるな」と言ったので、嘉手納にはニーピラは生えなくなった。

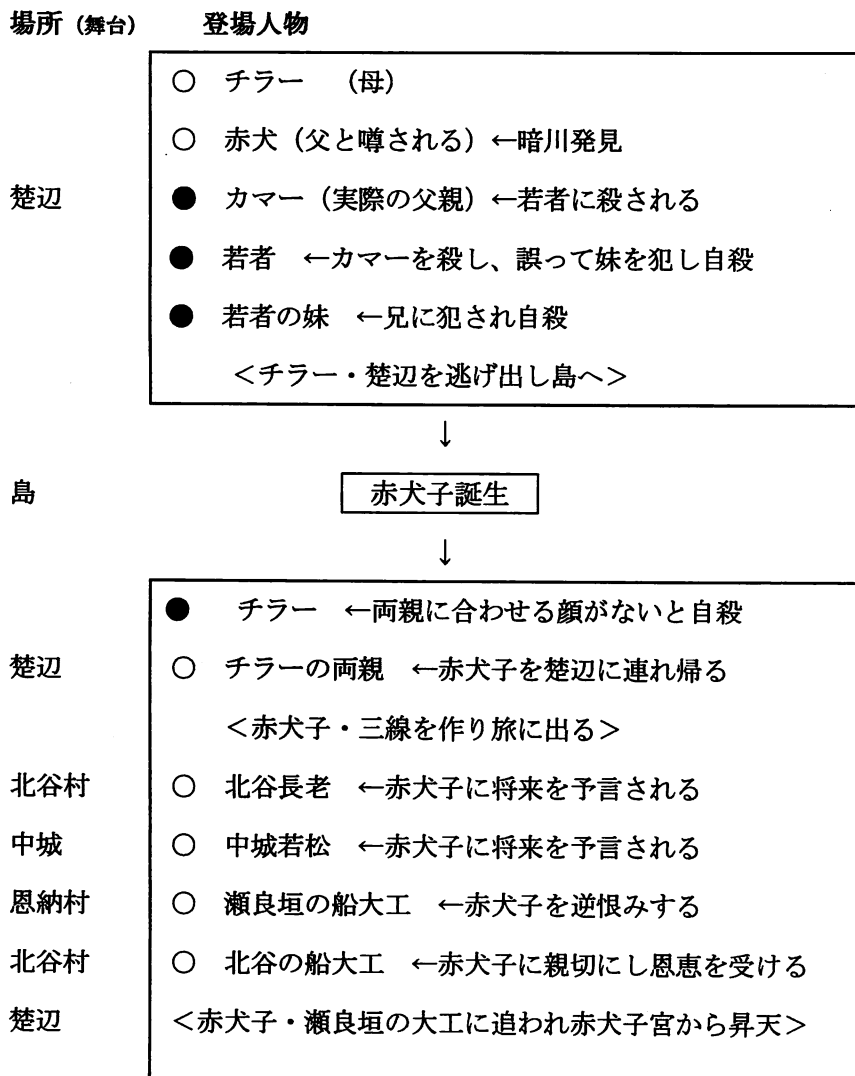
ということから楚辺では、昔から赤犬子を琉球音楽の始祖、あるいは五穀豊饒の神として奉り、毎年旧暦9月20日<sup>(\*13)</sup>には、「赤犬子スージ」を盛大にとり行っている。

#### 訳にあたっての留意点

(\*1) 屋嘉の屋号については、戦前まで楚辺に存在したものであるが、インフォーマントの話によると、現在はその家系は途切れてしまっている。( \*2) のチラーという名は女の子の一般的な童名であるため、登場人物のチラーは特別な子供ではなく、ごく普通の少女であったと思われる。( \*3) 赤犬は<赤犬>と言われるが、実際は大きな茶色い毛の大きな犬であったとの話しであった。( \*4) の井戸(カー)は、沖縄では神が宿るとされているところのひとつである。( \*5) ここでいう集落とは、旧集落であるため、洞窟はその南側、つまり現在はトリステーションの中に位置している。( \*6) 赤犬が発見して来た暗川は、楚辺の<sup>ななうたき</sup>七御嶽のひとつとされ、洞窟の中では水が沸いている。中が暗いため暗川(クラガー)と呼ばれる。( \*7) 大家も屋嘉と同じく楚辺の屋号のひとつ。現在、大家という屋号としては存在していないが、<sup>ウツキミヤ</sup>大屋新家などの屋号は現在も見る事ができる。( \*8) カマーもチラーと同様に男の子の一般的な童名であり、カマーも何処にでもいるような普通の男性であったことを窺い知ることが出来る。( \*9) 夜の目(ユールヌミ)の代替りの物であり、ここでは、トゥブシを指す。なぞかけ問題として登場している。( \*10) 先に出てきたなぞかけの答えてあり、松の樹脂質の多い部分で

作られる照明用具。戦前までは貴重視されていた。（\*11）南陽紹光禅師の別名。（\*12）「執心鐘入」の主人公。儒教道思想の権化とされる人物。これらの二名は、赤犬子に将来を予言され、後に活躍している。これらのエピソードは赤犬子がいかに高名な人物であったかを示すものである。（\*13）旧曆にしたがっているので、祭りが行われる日は毎年異なる。たいていは、11月初旬に行われる。

<図3>



補足

- ・ ○←生存者    ●←死亡
- ・ 赤犬子が唐へ行き五穀を持ち帰るエピソードがいつなのかは明記されていない。

『日本伝説体系』(山下 1989 345 - 349)によると、「赤犬子伝説」は読谷村の字長浜、字瀬名波、字伊良皆、字渡慶次、国頭郡宜野座村松田においても同様の説話が語られている。さらに、筆者が読谷村歴史資料館の資料により調べた結果では、他にも読谷村字宇座、字座喜味、字都屋、字喜名においても赤犬子の伝説は語れていた。(7) また、インフォーマントによれば、勝連村、宮城島にも同様の物語が伝えられているということである。

このように伝承されている地域をみると、「赤犬子伝説」が伝承されているのは、楚辺ないしは読谷村を中心としたごく限られた地域だけであるという事実が浮かんでくる。事実、那覇市、具志川市、石川市、名護市出身のインフォーマントは、「赤犬子伝説」については知らないと答えている。

## 第2節 伝説のバリエーション

以下は、調査により得られた物語のバリエーションを図示したものである。(図4) これらが語られる経緯については、第4章で論述するとして、ここではそのバリエーションのいくつかを詳しく見ていくこととする。

<図4>

|                | テキスト          | バリエーション1        | バリエーション2         | バリエーション3      | バリエーション4    |
|----------------|---------------|-----------------|------------------|---------------|-------------|
| カマーを殺した男       | 村のある若者(1人)    | 字内の複数の男         | 金持ちの男            |               |             |
| 赤犬の子と言われる原因    | 犬の子供ではないかと言う噂 | カマーを殺した男による悪意の噂 | 津波で赤犬とチラーのみが生き残る |               |             |
| チラーが逃げた原因      | 噂を恥じて自ら逃げ出す。  | 親に追い出される        |                  |               |             |
| チラーが渡った島       | 伊計島           | 津堅島             | 宮城島              | 久高島           | 宮古島         |
| 三線を作る道具又は機会    | クバの葉柄と馬の尾     | クバの葉            | クバの葉に落ちる雨の音で閃く   | 唐から来た楽器を改良    | 唐の三味線を弾きこなす |
| 赤犬子の最後         | 岩に杖を立てて昇天     | ススキから昇天         | 恩納村の宇嘉地の洞窟に逃げる   | 岩の中に入って行った    |             |
| 杖が変化した木        |               | デーグ             | マツ               | サラカチ          |             |
| 赤犬子が唐より持ち帰った五穀 | 麦、豆、粟、ニービラ    | イモ、ニービラ、麦、マージン  | タカキビ、キビ、粟、豆、麦    | 語られる五穀とその他に、米 |             |

まず、チラーが赤犬子を妊娠し、逃げたとされる島についてである。5つの島の内、宮古島を除いた4島(図5)は読谷村から沖縄本島を東側に進み、そこからさほど遠くない海上に位置している。どの島もチラーのような妊婦であっても船で行くことが可能な場所であると

いえるだろう。

三線を作るための道具についても多少のばらつきが見られる。赤犬子が、三線の始祖であると認識されている以上、このエピソードは、物語の核心であり、最重要部であると言える。にもかかわらず、バリエーションが存在しているのである。

さらに、赤犬子が唐より持ちかえたとされる五穀についてもバリエーションは存在している。しかし、インフォーマントが語ったところによると、赤犬子が持ち帰った作物については諸説あるが、いずれも楚辺で栽培するのに適している作物であったという。赤犬子が持ちかえった穀物によって、楚辺は豊かになったとのことであった。

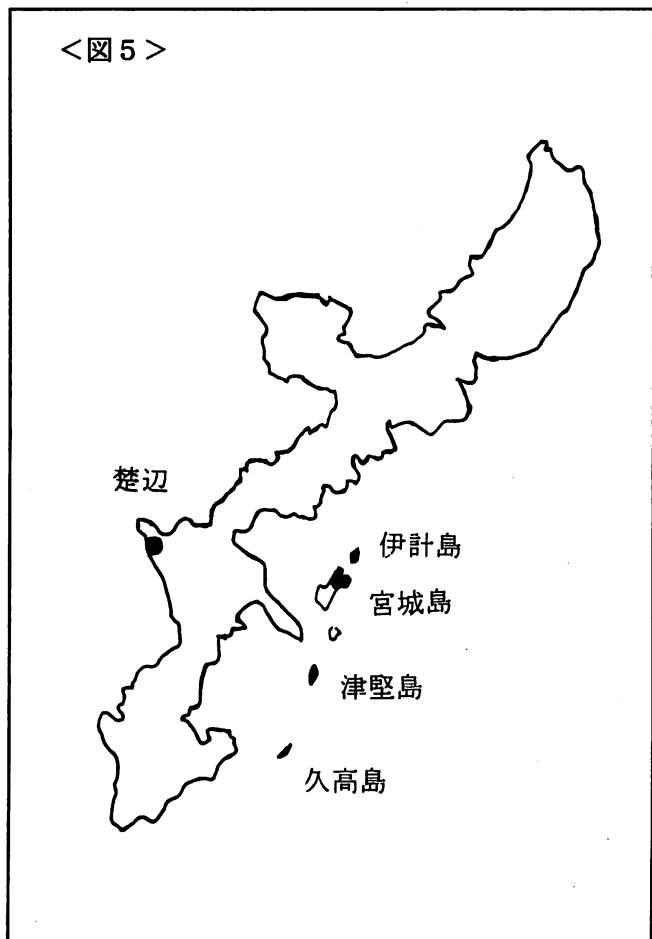
このことから、赤犬子が三線の神としてだけでなく、五穀豊饒の神としての神性も有していたことが明らかになる。ここで、なぜ彼が二重の神性を有しているのか、そして、なぜ楚辺の人々は音楽神としての赤犬子を語り継いでいるのかという疑問を提示しておきたい。

### 第3節 時代背景

赤犬子が活躍した時代は、彼が『おもろさうし』の第8巻にその名を残している事から推測できる。当時（16～17世紀）は、身分制度が確立し、中央集権が整えられた第二尚王統時代であった。琉球文化の黄金期と呼ばれている時代であり、また、中国より伝わったサツマイモが全土に広められるなど、「琉球の食糧革命」と呼ばれた時代でもあった。「赤犬子が唐より五穀を持ちかえった」と言うエピソードは、沖縄全土に起こった、この食生活の変化を象徴的に表わしているものだと考えられる。

さらに、当時は、各諸島と沖縄本島、または間切りの間を海路で結ぶ必要性から、間切

<図5>





りごとに地船（公用船）を持つことが義務化されていた時代であった。赤犬子が船に名前をつけるというエピソードはこのことと結びついていると考えられる。

以上のように、当時の状況が赤犬子伝説の中のエピソードに色濃く反映されている。

#### 第4節 伝説が語る人物像

おもろ歌唱者としての赤犬子は確かに実在していた。だが、歴史を見る限り、実際には伝説が伝えるような活躍はしていなかったようにも思える。

しかし、楚辺において語られている赤犬子像がまったく事実と反するものだとは言いきれない。少なくとも、幼い頃から伝説を聞き、多くの記念品（後に詳述）を目にしながら育ってきた楚辺の人々にとっては、伝説上の赤犬子こそが真実味をもっているのであろう。

では、楚辺で語られている犬との間に生まれ、三線を作った赤犬子は何処から来たのか。その答えは、「赤犬子伝説」の構造を宮古島などに伝わる犬祖神話と比較する事によって見えてくるものと思われる。

### 第3章 犬祖神話との比較

#### 第1節 犬祖神話

「犬祖神話」とは、犬と人間の間に生まれた子供が、ある一族の始祖となる経緯を伝える神話である。大林は、世界に広く分布する「犬祖神話の形式」を8形式に分類した上で、東南アジアの犬祖伝承（神話）の形式としては5つをあげている。（大林 1993 125-132）ここでは、そのうち、以下の4形式を取り上げる。<sup>9)</sup> また、図6は、今回取り上げた形式を持つ犬祖神話の分布をもとに作図した分布図である。この図から、犬祖神話が伝承されている最北端の地が宮古島であることがわかる。



##### (1) カラング型

ジャワ賤民のカラング族の起源について伝えられている伝承を代表例とする。娘が特定の仕事をした者と結婚すると公約し、犬と結婚。息子が生まれ、父親（犬）を殺し、母親と近親婚をおこない、特定の集団の始祖となる。

##### (2) 癩病型

王（王女）が癩病にかかり、癒した者と王女の結婚を公約。犬がなめて治し王女と結婚。王女と犬は追放され、男児をもうける。息子は父親を殺し、母と結婚。特定の

集団の祖先となる。

### (3) 漂着型

少女が雄犬と交わり、犬と共に追放される。その子孫が、特定の集団の祖となる。

### (4) 洪水型

洪水により、人類が滅亡する。生き残ったのは1人（男または女）の人間と1匹の犬（雄または雌）のみであり、結婚し、特定民族の祖となる。

これらの物語は、日本に入ると、母と子の相姦を認めず、犬の血の混入を許さぬ物語として語られるようになる。(福田 1975 51) その為、日本国内で見られる「犬糞入」のほとんどは、犬を殺された妻による夫（人間）殺しというエピソードが現われ、「7人の子を生んだ妻でも心を許すな」という教訓としてのことわざのみを提示する昔話である。

だが、沖縄の宮古島や与那国島には犬祖神話のモチーフが痕跡状態として存在している。<sup>(10)</sup>そして、それらの物語は、南方から伝わったものであり、日本本土の物語が土着化したものではないことが既に大林により指摘されている。(大林 1973 329 - 335)

## 第2節 構造の比較

「神話」とは異なり、「伝説」であるところの「赤犬子伝説」では、赤犬子は正式には人間同士の子供であると語られている。しかし、楚辺の人は「赤犬子は赤犬と人間（チラー）の子供である」と認識している。このことから、赤犬子伝説を「犬祖神話」と同じ骨格を有し、異類婚をベースに語られる伝説として考えて良いのではないだろうか。福田も『犬糞入の伝承』において、赤犬子伝説を宮古島、与那国島に伝わる犬祖神話のバリエーションとして紹介している。

以下において、犬祖神話と赤犬子伝説を比較してみよう。

「犬祖神話」の構造を前節であげた形式をもとにまとめると以下のようになる。(カッコ内は形式番号)

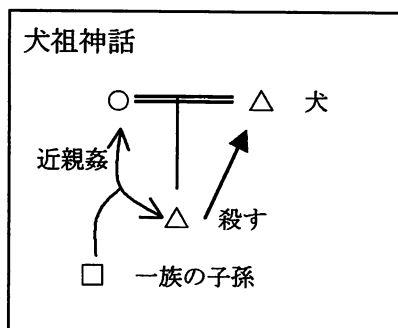
- ①. 問題の発生 (1. 2)
- ②. 犬が問題の解決をする (1. 2)
- ③. 公約 (1. 2)、戯れ (3) または、犬と人間の女だけが生き延びることにより他の選択肢が与えられないこと (4)、によって犬と女が結婚する。

- ④. 犬と女は船によって追放（2. 3）される。
- ⑤. 男児がうまれる。（1. 2. 4）
- ⑥. 息子が犬（父親）を殺す。（1. 2）
- ⑦. 母親と近親婚を行う（1. 2）
- ⑧. 母親と息子の子供（1. 2）または、犬と娘の夫婦（3. 4）は、ある集団の祖となる。

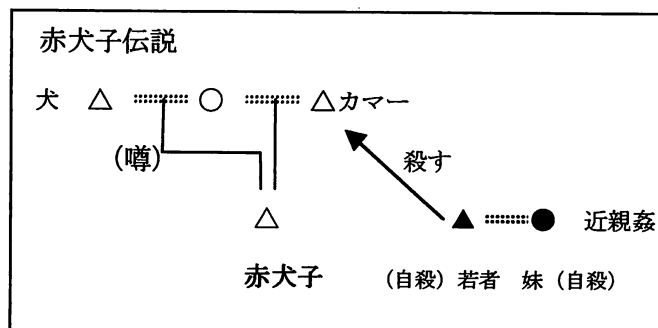
以下は「赤犬子伝説」の内容をまとめるたものである。

- ①. 問題の発生。（楚辺が早魃に見舞われる）
- ②. 犬による問題の解決。（赤犬がクラガーを発見）
- ③. 女が人間の男との子供を妊娠。（チラーはカマーとの子供を妊娠するが、世間に認められた子供ではない）
- ④. 生まれてくる子供の父親が第三者により殺される。（カマーは字内の若者に殺される。）
- ⑤. 子供は犬の子供であるとされる（女の妊娠が明らかになり、犬の子供ではないかと噂される。）
- ⑥. 近親相姦を犯した兄妹の自殺（カマーを殺した若者はチラーと間違え妹を犯し、ともに自殺）
- ⑦. 女と犬が船に乗る。（チラーは、赤犬と共に近くの島に逃亡）
- ⑧. 男児の誕生（赤犬子の誕生）
- ⑨. 子供は成長し文化的英雄となる。（赤犬子の偉業とその後の活躍）

<図 7>



<図 8>



このようにあげて行くと、双方の物語の中で起こっているエピソードのひとつひとつが酷

似していることがわかる。

だが、図7と図8の比較からもわかるように、「赤犬子伝説」では、カマーの登場により犬は噂によって語られるだけの存在となる。さらに、子による父親殺しのエピソードについても、第3者（若者）が登場し、子（赤犬子）が誕生する以前に行われている。カマーの存在は両者に「子供は本当に犬の子供であるか否か」と言う決定的な相違点を与えている。つまり、「赤犬子伝説」では、主人公の中に異類である犬の血の混合を許していないのである。

さらに、近親婚のモチーフも否定されている。犬祖神話に見られる母子相姦のモチーフは、「近親相姦を犯した兄妹がともに自殺を図る」言う形に変更された上で、否定されているのである。では、なぜこれらのモチーフは否定される必要があったのであろうか。

### 第3節 モチーフの否定

赤犬子伝説において、犬祖神話に見られるいくつかのモチーフが、一度語られた上で否定されてしまう理由を検討する為には、先になぜ赤犬子の父親は犬（異類）でなければならなかったのかについて言及する必要がある。物語の中では、赤犬子の両親について、真実と噂と言う形をとることによって2通りの可能性が示されている。(図9)

<図9>

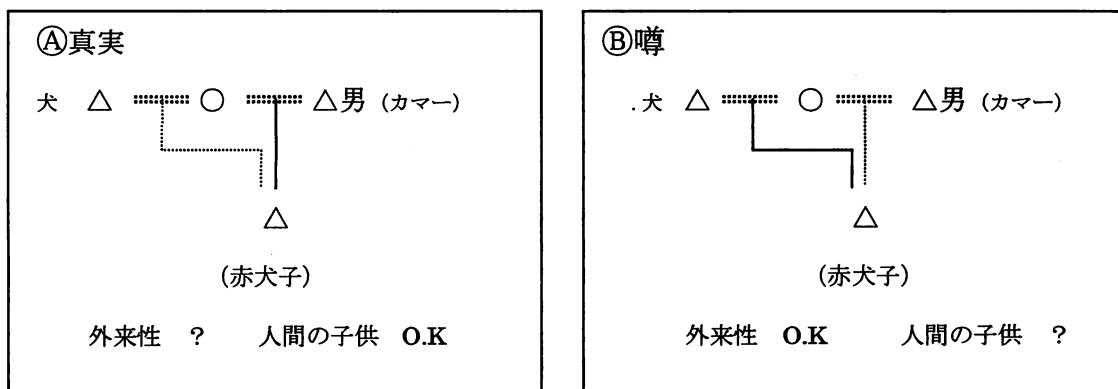


図9の①の両親のあり方を見た場合、赤犬子がれっきとした人間の子供であることは証明される。しかし、彼が三線を発明し、<sup>あざ</sup>字の守り神となるほどの偉大な力をもつ人物になり得たとは考えにくい。そこで、②が示す父親の外来性が必要となる。父親が外界（未知）の力を内なる世界にもたらす者であった場合、その子供は、自分たちの世界の子宮（女性）

から誕生し、外界の力も取り入れた、神にもなり得る人物としての登場が可能となる。

このような、外界の力及び文化をとり入れた過程を説明する物語には、しばしば異類婚が語られている。(11) ある社会に、良くも悪くも大きな変化がもたらされた場合、その定義付けのために、異類が変化のきっかけとして登場する説話が語られるようになるのである。

赤犬子伝説における犬の役割は赤犬子に神性を持たせることだったと考えられる。クラガーを発見し、楚辺に水と光を与えるほどの霊的な力を持つ犬を父親とすることにより、はじめて彼は神としての力を得ることができるのである。

では、なぜ犬とチラーの婚姻は否定されたのか。それは、赤犬子伝説が伝説である所以であろう。関が、「伝説は、信仰だといっても、祖先を信じ、神仏を信じるという意味における信仰ではなく、事実として信ずるもの」であると述べているように、(関 1977 138) 伝説は、実際に起こった出来事として信じられる物語でなければならないのである。しかし、常識として考えた場合、異類との交わりの末に子供が生まれたなどということは、信じる事の不可能な事態である。さらに、小澤は、日本で伝承される異類婚は、その配偶者が異類であることが明らかとなった時点で、婚姻の破綻が生じていることから「日本人には動物との結婚など身の毛のよだつような日常感覚」が存在していたと述べている。(小澤 1994 199) 以上の事からも犬との間に生まれた子供が、自分たちの心の抛り所となるような祖先となり得たとは考えにくい。しかも、赤犬子は、楚辺の守り神となるべき存在なのである。彼が異類婚により生まれた可能性を否定する必要性は、単なる昔話に比べ、高かったことは言うまでもない。

だからと言って、赤犬の存在を消してしまったのでは、赤犬子に神としての力を与える事は不可能となる。その為、人々は、あえて彼に「赤犬の子」という名を冠したのであろう。犬の子であることを自分たちが呼称することにより、赤犬子に神性を与えたと考えられる。

その一方で、「赤犬子が犬の子であったという事実はなく、単なる噂に過ぎなかった」と言う真実を伝説に組み込み語り継ぐことによって赤犬子が紛れもない人間であることを明確にし、そこに生じた矛盾を乗り越えてきたのではないだろうか。

近親相姦のモチーフが否定されていることについては、伝承していく上で人々の有する倫理観と相いれなかったことが原因だと思われる。「沖縄における伝説は、自己の一族のタブーや誇りを述べる場合が多い」(沖縄大百科事典) とする伝説の性格と照らし合わせると、近親相姦の罪悪性を伝える為に、あえて当事者の自殺という形によって否定してい

るのだと考えられる。

福田は「赤犬子伝説の冒頭には、兄妹相姦の島建伝承の混入の後が伺える」と述べている。(福田 1975 53) しかし、筆者は、島建伝承(兄弟相姦)が混入したというよりも、むしろ、もともと物語の中に存在した母子相姦のモチーフが、人々の間で頻繁に語られるようになるにつれ、その語り手により意図的に否定されていったのではないかと考えている。

## 第4章 沖縄における伝説と楚辺の赤犬子伝説

### 第1節 説話が伝説化しやすい土地

沖縄は説話が伝説化しやすい土地である。日本民俗学では、伝説の特徴を『特定の山や沼淵、木石、旧家などの具体的な物事と結びついて、そのいわれを説くもの』と定義している。関は、「伝説は、事件そのものを事実とするために、昔話とは異なりいわゆる具体的な足場を求めて定着する必要があるため、身近に起こった事件として伝えられる。事件と結びついた伝説はほとんど村の周辺の目にふれるところにあり、人物は常に庶民の知った者と結びつく傾向をもつ」（関 1977 136）と、伝説について解析している。

また、沖縄の説話のあり方について岩瀬は、「沖縄の伝承者は伝説・説話の信憑性を昔話にも覆い被せる為、それらの説話は、広い意味での伝説的要素を含んでいることになる」（岩瀬 1987 75）と述べている。彼は、「天人女房」を例として提示し、沖縄諸島にしても、奄美諸島にしても、天人が舞い降りて水浴びをしていた川や淵だと称される土地がいくつも存在していることを上げ、説話が伝説化する過程を説明している。さらに、沖縄では、ストーリー性のある昔話のみでなく、笑い話でさえも伝説化すると述べている。

確かに筆者が行ったフィールドワークの中でも、多くの記念品にめぐりあった。犬が発見したとされる湧き水や川にしても、楚辺のクラガーをはじめ、伊計島のインガー（犬川）、宮古島のインガーなどいたるところに存在している。

以上のような事例からも、沖縄の人々が、昔話に信憑性を持たせるために多くの物を記念品として捉えてきた姿を見ることができる。<sup>(12)</sup> その結果、沖縄のチテーバナシの多くは彼らが意識したか否かにかかわらず、広い意味で伝説化してきたのであろう。

### 第2節 沖縄社会との矛盾

本説では、テキストを用いて、赤犬子伝説と沖縄社会のあり方を比較し、そこに生じていた矛盾を明らかにしていく。これらの矛盾は、その構造を他地域から伝わった説話から取り入れたことにより起こったものであると思われる。

#### ・オナリ神

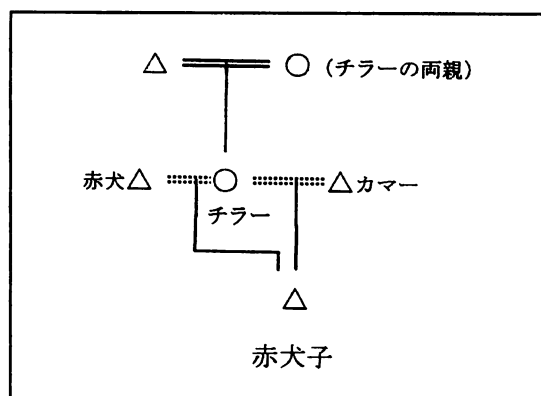
オナリ神とは、沖縄における信仰のひとつである。その内容は、「兄弟の健康・幸・厄払い・



旅立ち及び農耕儀礼などの場合に、加護と豊饒などの靈力を姉妹が与える」(村武 1985 341) というものである。沖縄の男性は、姉妹(ウナイ)又は、父方のオバによって靈力及び生産力を与えられるのである。

では、赤犬子に、そのような靈力を与える事の可能な人物は存在していたのだろうか。テキストの中から赤犬子と血縁関係を持つ人物を全て図示してみよう。(図10)

この図で見る限り、赤犬子に靈力を与えることのできる人物は存在しない。その為、赤犬子は靈力を振るうことはできないはずであり、赤犬子が五穀豊饒をつかさどる神でもあるという事実は、沖縄の一般常識では考えにくい事態である。しかし、先にも述べたように、赤犬子には赤犬という靈力を与える存在がいた。それにより、赤犬子は、姉妹の加護がなくてもその力を振るうことができたのである。



<図10>

では、逆に赤犬子にオナリがいたとしたらどうであろうか。本来オナリとは、加護を与える本人にのみ豊饒の力を与えるものである。彼の力がオナリから与えられる物であった場合、彼の豊饒の力は、自分の身内にもみ発揮される内向きの力としてしか作用されないものになってしまう。その力を楚辺全体にたいし振るう赤犬子には、むしろオナリはいない方が良かったといえるのではないだろうか。

### ・位牌

沖縄の社会では、位牌を祖先そのものとして丁重に奉り、それを世代から世代へと継承することを重んじる。人々は、その行為により、祖先の靈との繋がりを深め、さらに、現在における親族関係を明確にしているのである。

楚辺には、前述したように赤犬子の位牌<sup>(13)</sup>が継承されている。しかし、その位牌を守っている家は、チラーと同様の「屋嘉」の屋号を持つ家でもなければ、カマーが持っていたとされる「大家」の屋号を持つ家でもなかった。位牌を継承していたのは、サークと呼ばれる楚辺の権力者の家であった。サークが位牌を管理している理由は、位牌を作った当時そのようなものを管理できるような財力と権威を持つ家として存在していたのが、その家だけであったからだという。

赤犬子の位牌は、先祖代々受け継がれてきたものではなく、のちに作られた物であった。また、赤犬子の生まれた家系で管理しているものでもなかった。赤犬子の存在があまりに大きくなった為に、大家の家では管理できかねるものだという理由のみでサークが引き受けたのか、それとも、大家が受け取りたがらなかったのかはわからない。

しかし、彼は個々の家系から生まれた人物ではなく、楚辺全体から生まれ出てきた文化的英雄として受け容れられていたため、位牌によって存在の確認をすることを必要としない人物として認識されてきたのであろう。

このように「赤犬子伝説」は、その構造が他地域から入ってきたことによって、抱えることになった実際の社会との矛盾を見事に乗り越えてきた伝説だと言える。そこには、その物語を可能な限り沖縄の社会に沿う形式に変換しながら、伝承し続けてきた楚辺の人々の不断の努力が見て取れる。

### 第3節 楚辺における伝説のあり方

本節では、「赤犬子伝説」を、「楚辺のアイデンティティを保つ為に不可欠な伝説」として捉え、伝承法などにスポットを当てることによりその存在意義を探ることとする。「赤犬子伝説」の必要性は、楚辺が字造りを進めて行く上での「字別構想」のひとつとして「アカインコの里造り」を掲げ、赤犬子の存在を字造りの手段として利用していることからわかる。

#### ・伝承法とバリエーション

赤犬子伝説には、なぜ先に上げたようなバリエーションが存在するのであろうか。インフォーマントの話しによれば、戦前に行われていた赤犬子伝説の正式な伝承方法は「三線を弾く集まりのときに長老方が青年（男性）たちに伝説を少しずつ語り聞かせていく」というものであった。集まりに参加しない女性たちは各々の祖母、または伝承の場で伝説を聞いてきた男性から語り聞かされることによって知ったとされている。

男性たちの間でのみ正式に継承されていたこの伝説は、一生を楚辺内で暮らし、村社会を維持していくこととなる男性が共同体意識を獲得するために用意されたものであったといえる。いずれ、楚辺を去る可能性のある女性にとっては、男性たちほど共同体意識を獲得する必要性はなかったのであろう。

戦後は、正式に赤犬子伝説を伝承する為の集まりは開かれていない。代わりに現代では、赤犬子の祭りである「赤犬子スージ」（後述）の時に赤犬子についての解説が行われている。また、子供時代に母親に昔話として語り聞かされたというインフォーマントも多い。さらに、赤犬子スージは「青年会」<sup>(14)</sup>の参加する行事の一つとしても位置づけられている。人々は青年時代に祭りの担い手として参加することにより伝説の詳細を知ることとなる。このように、この伝説は、楚辺で生活することにより自ずと知っていくものようである。

細部に異説の多い理由を以上の事から推察すると、現代における伝説の語り手が主に女性が中心であるためだと思われる。子供に昔話を聞かせる役割は、たいていの場合女性が担うものである。しかし、女性は正式な伝承の場には立ち会っておらず、さらに婚姻などにより異なる字から楚辺に入って来ることもある。外からきた女性たちは、夫などから聞いた伝説を子供や孫に語り聞かせるに当たり、自分たちの知っている物語を話の中に持ち込んだとも考えられる。女性たちの持ち込んだ異説の積み重ねが、現代のような話者によって多少の異なりを見せる伝説を生み出してきたのである。

しかし、女性たちにより多くの異説を持ち込まれたにもかかわらず赤犬子伝説は確固とした構造を持った伝説<sup>(15)</sup>である。それだけ、楚辺の人々は伝説の構造を維持していくための努力をしてきたのであろう。なぜなら、伝説の構造を失うことは、明確な共同体意識を獲得していくための手段を失うことにつながるからである。そのため、生活のさまざまな場面において、伝説の再生産を図ることが求められた。次にその手段として最も有効な赤犬子伝説に関わる祭りについて論述していきたい。

#### ・伝説の再生産としての祭り

楚辺には、「赤犬子スージ（赤犬子祭り）」という独特な年中行事がある。この行事は毎年、旧暦の9月20日に行われ、楚辺が行う年中行事の中でも大きなもののひとつである。赤犬子スージは、五穀豊饒を願って行われ、同時に楚辺の守り神としての赤犬子の魂をお迎えするという意味も持っている。

楚辺の年中行事は、戦後急激にその数が減少している。そのような中で赤犬子スージは戦後も行われ続けている数少ない行事である。なぜ、赤犬子スージが今なお行われ続けているのかについて安里は、二つの理由を挙げている。「一つは、拝所である「赤犬子宮」の位置がある。赤犬子宮は戦後楚辺の拝所のほとんどがトリイ通信基地<sup>(16)</sup>の内部に取り込まれてしまった中で、幸運にもその外部に位置している。つまり、赤犬子宮は楚辺の人々

が、自由に入出りできる残り少ない拝所の一つなのである。そのため、赤犬子宮に奉られている赤犬子共々戦後になってからより一層人々に心の拠り所として受け容れられていったと考えられる。二つ目の理由としては赤犬子スージを行うに際しは、ノロ<sup>(17)</sup>などの特別な霊力をもった司祭者は必要なく、楚辺の中で日常的にリーダーシップをとっている区長、及び公民館の職員による祭りの進行が可能であったということもあげられる。これらの理由により赤犬子スージは集落をあげての盛大な祭りとして、継承されているのである。」

(安里 1985 44) この 2 つの理由に筆者は異論を挟む余地がないが、調査からえられた民俗的知識をからは、別の解釈も可能である。

一般的に、人々は出入りが不自由な場所ほどその場所を神聖視する傾向にある。しかし、赤犬子宮は誰にでも出入り可能な場所に存在している。また、楚辺では、昔からノロに霊的な力をもともと求めていなかったという事実がフィールドワークにおいて明らかとなっている。また、楚辺でノロがいなくなったのは戦前の事であり、年中行事数が減少しているのは、戦後の事である。

では、なぜ赤犬子スージは、戦後も盛大に行われる行事として継承されているか。それは、「赤犬子伝説」が戦後その信仰自体を一般化させ、赤犬子とその神性を変化させる(後述)中で、赤犬子宮、そして赤犬子スージのあり方が人々の求めたものと合致したためだとも考えられるのではないだろうか。

#### ・存在を証明するもの

楚辺には、赤犬子に関する記念物が数多く存在している。「赤犬子スージ」の行われる「赤犬子宮」、海沿いに建てられている「赤犬子の墓」(図 11)、楚辺の小字につけられた「赤犬子原」という地名、恩納村の宇嘉地にある昇天後の赤犬子が本当は隠れ、生活していたとされる洞穴<sup>(18)</sup>、そして、「赤犬子の位牌」である。

位牌は 7・8 年前に作り替えられてい



海沿いに建てられている墓 <図 11>

る。主な理由は、楚辺では「赤」という文字で表されている「アカ」の部分が、「おもろさうし」と同様な「阿嘉」という漢字で表記されていたためであったという。伝説に詳しいインフォーマントは『赤』をその名に冠したアカイヌコでなければ、楚辺のクラガーを発見したとされる赤犬との結びつきを見出すことができない」と語った。

インフォーマントの1人が「文献上は伝説の人物かもしれないが、楚辺において赤犬子は紛れもなく実在の人物である」と語ったように、楚辺の人々が先祖代々語り継いできた赤犬子の姿は、ひとつの文化的事実として継承されているのである。

#### ・伝説の楚辺における役割

伝説の継承にはその伝説をより身近なものとするため、多くの行事や組織による支えが不可欠である。これらの働きにより、赤犬子伝説は生き生きと生活の中に根づいた形で、刷り込まれるようにして継承されてきたのである。

楚辺人<sup>スピンチュ</sup>であれば、だれでも知るところの赤犬子伝説が、楚辺において果たす役割は、単なる精神的な誇りと自信の拠り所ではない。楚辺出身の男女を両親とする赤犬子の存在は人々にとって、それらを、血、肉、骨（霊的なもの）の中にも見出すことのできるものとして伝承されている。人々が日常生活の中で皮膚感覚的にも、赤犬子に共同体意識を持つことができるからこそ、赤犬子伝説は、特に重要な伝説としてとらえられている。逆に言えば、この伝説が生きて息づいているからこそ、楚辺は、明確な共同体意識を保持できていると言い換えることさえできるだろう。

## 第5章 今後の課題

ところで、先述した赤犬子が「音楽の神」と「豊饒の神」という二重の神性を有しているのはなぜかという疑問は、以下のようには考えられないだろうか。

楚辺の人々が先に赤犬子に求めていたものは「豊饒の神」としての存在であった。このことは、赤犬子スージが「五穀豊饒を願う祭り」として開催されている事からも窺い知れる。そして、楚辺には、地域に密着した豊饒神の伝説を作りあげることが可能な要素として、以下のような事実があった。

- ・ 沖縄全体に広がる犬川（インガー）伝説が楚辺では、クラガーを発見して来た赤犬伝説として伝えられていた事
- ・ 楚辺出身で名を<犬子>というおもろ歌唱者であり、音楽に秀で三線を見事に弾きこなす人物の存在
- ・ 近隣の島に「犬祖神話」が伝承されていたという事実

もともと、犬は地域に豊饒を与える為に不可欠な水と光をもたらす霊的な存在であると認識されていたのである。そして、楚辺には、<犬子（犬の子）>という名を持つ人物がいた。さらに近くには、犬と人間の間に子供が生まれ、偉業を成し遂げる神話が伝えられていたのである。これらの要素を人々が自ら組み合わせたことにより、まず先に、豊饒の神としての赤犬子の存在を語る伝説が誕生してきたと考えられる。

では、なぜ現在の赤犬子伝説では、「音楽の神」としての存在意義が重視され、「豊饒の神」としての神性は、まるで付け足しのように語られるのみなのであろうか。それは、現在の楚辺が「豊饒神」の存在をさほど求めていないためであろう。物質的豊かさが満たされた現代においては、むしろ人々は、「音楽神」が象徴する精神的豊かさ、そして、インフオーマントが語った「平和の象徴」としての神の存在を求めていると考えられる。

また、現在読谷村が「芸能の町」としての文化的事業を行っているため、その功績により、読谷村字楚辺を「琉球音楽発祥の地」<sup>(19)</sup>と位置付ける赤犬子の存在は、楚辺という地域を越え、読谷村全体から求められる存在となったのである。<sup>(20)</sup>

このように、赤犬子伝説は、各時代において人々が求める神性を前面に掲げながら語り

継がれてきた伝説なのではないだろうか。現在は「音楽神」としての存在を語られているが、これからの社会変化に伴いさらにその神性を変化させて行くことも考えられる。また、赤犬子がいつの時代にその表立った神性を「豊饒神」から「音楽神」へとして変化したのかについて調べることにより、楚辺の豊さの変遷を見る事も可能であろう。

本論文で、以上のことを実証する為には、あまりにも調査不足であり、時間も足りない。その為、この推論を検証すること、そして、赤犬子伝説という切り口から楚辺の変遷を検証することを今後の課題としていきたいと思う。

最後に、フィールドワークに赴いた際にお世話になりました、村山友江さん、比嘉豊光さん、楚辺区長さん、読谷村立歴史民俗資料館の名嘉真宜勝先生。また、貴重なお話を聞かせていただいた、比嘉恒健さん、比嘉順豊さん、松田政春さんをはじめとする多くのインフォーマントの皆様。お忙しい中、犬祖神話についての文献を提示してくださいました大林太良先生。多くのアドバイスをくださいました濱田英作先生、山内健治先生、石井昭彦先生。そして、ご指導くださいました林美枝子先生に心よりお礼を申し上げます。

## 注釈

1. 沖縄戦時における米軍上陸地点であり、現在も米軍基地の経済的な影響を強く受けている地域。米軍によるトリイ通信基地の建設にともない、旧集落から現在の新集落に字単位で移住した経歴を持つ。
2. 赤犬子の拝所。毎年旧暦の9月20日には赤犬子を奉るための祭りが行われる。
3. 「赤犬子」の呼び名は「アカノコ」「あかいんこ」「アカヌク」「あかのおゑつき」など各種あるが、本論文では、その名の由来を最も的確に表わしている「赤犬子」(アカイヌコ)を用いることとする。
4. 古い時代から沖縄に伝わってきた説話を指す言葉であり、沖縄本島を中心として広がっている。そのジャンルの範疇は、広く民間神話、伝説、民間史伝、昔話、世間話にいたっているため、民間説話の全てがこのチテーバナシの範疇に入る。
5. 奄美・沖縄諸島に伝わる古歌謡。ほぼ12～17世紀にかけて謡われたと考えられている。
6. 首里王府により編集された、沖縄・奄美諸島に伝わる「おもろ」を集めた沖縄最古の歌謡集。1531年より、約90年かけて全22巻が完成。収録歌の総数1554首。
7. 琉球三味線のこと。本論文では沖縄で一般的に使われている三線(サンシン)という呼び名を用いる。『高等学校 琉球・沖縄史』には、『14世紀後半から15世紀初頭にかけて、中国から三線が伝えられた』とあるように、三線は歴史上中国から輸入されてきた楽器である。
8. その内容は、「犬によるクラガーの発見」などエピソードの一部のみを語ったものがあった。
9. 大林が5つ目にあげた「親孝行型」は犬が雌犬であり、犬舐入の形式を示していないため、ここでは取り上げないこととした。
10. 宮古島、与那国島に伝わる犬祖神話を形式に当てはめれば、(3)、(4)の型に当てはまる。
11. 異類婚が語られる説話として、「蛇舐入・<sup>オビマ</sup>学環型」が伝える由来があげられる。相手が蛇とは知らずに妊娠してしまった娘が5月の節句に菖蒲湯に入り、身を清めたことを伝える。以上のことにより、この日には、菖蒲湯に入るようになったとされている。
12. 伝説には、信じるのが可能なだけの真実味が物語の中に要求される。その為、伝説



を抱える地域には、多くの記念品が用意されることとなる。

13. 位牌の存在意義は、字として赤犬子を奉ることにある。
14. 18 才になると楚辺の青年のほとんどが加盟する社会組織。
15. 多くのインフォーマントがその物語のあらすじを語ってくれたが、その中には、赤犬子が作り出したものは、実は三線ではなかった、犬の子ではなく猫の子であったなどの物語を根底から覆すような異説は存在しなかった。
16. 楚辺の旧部落の所に建設された、米軍の軍用施設。その中には今でも楚辺の人々の墓、畑、拝所などがあり、利用されている。
17. 王府時代、山村の祭祀主として農耕儀礼を主導的に司祭することにより宗教的村落を管理支配した女性神役。
18. 別の町にあるにも関わらず、「拝みにいく」「見学に行ったことがある」と答えたインフォーマントもいた。
19. 琉球音楽の祖・赤犬子の出身地である楚辺は、琉球音楽発祥の地といわれている。
20. 1974 年から行われている「読谷村まつり」の 7 回目より「赤犬子スージ」を簡略化した「赤犬子ウンチケー（赤犬子お迎え）」の儀礼が行われている。

## 参考文献

- 安里正実 1985『読谷楚辺のアカヌクまつり』『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第9号』  
読谷村立歴史民俗資料館編集
- 岩瀬 博 1976『沖縄の昔話』『昔話研究入門』 日本口承文芸協会編 三弥井書店  
1987『沖縄説話』『民間説話の研究』 大林太良編 同朋舎出版
- 大林太良 1966『神話学入門』 中公新書  
1973『琉球神話と周囲諸民族神話との比較』『沖縄の民族学的研究』  
日本民族学会編 日本民族学会  
1993『東南アジア・オセアニアの犬祖神話』『日本人と日本文化の形成』  
埴原和郎編 朝倉書店
- 沖縄タイムス社編集 1991『おきなわの祭り』 沖縄タイムス社
- 小澤俊夫 1994『昔話のコスモロジー』 講談社
- 関 敬吾 1977『日本の昔話 比較研究序説』 日本放送出版協会
- 新城俊昭・沖縄歴史研究会 1997『高等学校 琉球沖縄史(改訂版)』 東洋企画
- 曾根信一 1988『読谷村史 第三巻 資料編2 文献にみる読谷山』
- 武田 正 1995『昔話の発見 - 日本昔話入門 - 』 岩田書院
- 比嘉豊光・村山友江 1990『アカノコ 楚辺史資料No.20』 字楚辺誌編集室発行
- 福田 晃 1975『犬聳入の伝承』『昔話:研究と資料 第4巻』 三弥井書店
- 松前 健 1976『日本神話と昔話』『昔話研究入門』 日本口承文芸協会編  
三弥井書店
- 村武精一 1985『家の中の女性原理』『日本の民族文化体系〔普及版〕第10巻  
「家と女性=暮らしの文化史=」』 小学館
- 山下欣一〔他〕 1989『日本伝説体系 第15巻 南島編』 みずうみ書房
- 読谷村教育委員会 1981『読谷村民話資料集3 長浜の民話』  
読谷村立歴史民俗資料館編集 読谷村役場発行

Yuki TANEKAWA, A consideration of origin and succession:Case of Akainuko Densetu in Yomitan-son Sobe / REC TECHNICAL REPORT, No.0036, Feb.2000, Hokkaido Research Center of Environment and Culture,SIU (Sapporo international University).

[執筆者紹介]

○ 種川 幸 (たねかわ ゆき)

札幌国際大学 人文・社会学部 国際文化学科

◆本論文は研究センター内規に定めるレフリー制に基づいて掲載しています。◆

査読者：札幌国際大学人文・社会学部助教授 林美枝子（日本民俗学会等）

札幌国際大学人文・社会学部講師 西脇裕之（日本社会学会等）

2000年2月29日 刊行

---

編 集：北海道環境文化研究センター

発 行：学校法人 札幌国際大学 和野内 崇弘

〒004-8602 札幌市清田区清田 4-1-4-1 TEL (011) 881-8844 FAX (011) 885-3370

---

